

元曉の浄土思想に於ける生因説

康 東 均

元曉著述の『両卷無量寿経宗要』と『阿弥陀経疏』を中心に、元曉の浄土思想における（生因説）、すなわち、浄土に往生するがための因の定義をどのように下したかということに窮つてみたいと思う。

元曉は、往生因を正因と助因とに分けて述べている。正因とは「発菩提心」であり、助因は「多種」あれど、その中でも特に「十念」を取りあげている。

彼は先ず、『観経』では「十六観」、『往生論』では「五門行」を、そして『大経』では「三輩因」を以て「往生因」としてゐることを指摘しながら、特に『大経』における「三輩」をそのまま引用している。三輩とは、上輩・中輩・下輩であるが、下輩に就き、不定種性人と菩薩種性人とに分けて述べている。

元曉はさらに、正因と助因について詳しく述べている。まず菩提心については、

不_レ顧_二世間富樂、及_二与_二乘涅槃、一向志_二願_二三身菩提_一と定義している。

発菩提心には「隨事発心」と「順理発心」との二つがある。これは、曇鸞が彼の『論註』で述べているような「遠離三種菩提門」と「隨順三種菩提門」との二つに分けてゐるのは少しその義を異に

しているといえよう。しかし、その思想をさらに発展させたと思つて良いと思うものである。

隨事発心とは、無数の煩惱を断じ、無量の善法を修し、無辺の衆生を度せんとの三事を願することである。元曉はなお、「煩惱を断ずるは如来の断徳正因であり、善法を修するは智徳正因であり、衆生を度するは恩徳正因である。この三徳本を合して無上の菩提となす。すなわちこれ、三心であり、總じて無上菩提の因となす」と補足している。

次に「順理発心」とは、「諸法は幻夢の如く、有に非ず無に非ず、言慮を離絶するを信解し、その信解に依りて广大心を発す」ことである。「煩惱・善法有るを見ずといえども、断じ、修すべきことを撥無せず。是の故に、悉く断じ、修すことを願するといえども、（これは『大経』に云う）無願三昧に違はず。無量有情を皆度せんことを願するといえども、能度・所度が存せぬ故に、能く空・無相（三昧）に随順する」のであり、「是の如く無量衆生を滅度すれど、実に衆生、滅度得る者なく」と締めくくつてゐる。

元曉はなお、「隨事発心は可退義の不定種性人が能く発し得、順理発心は無退転の菩薩種性人が能く発し得る」発心であると云い、この発心を高く評価して、「是の如き発心の功德は無辺である。たとえ、諸仏が窮劫に彼のよろもろの功德を演説するといえども、なお尽すこと能わず」と述べてゐる。

曇鸞の『論註』では、礼拝門、讚歎門、作願門、觀察門、廻向門の五念門を行するを以て往生因とする。その中で廻向門は『大経』の三輩衆生の中に説くところの無上菩提心を云うのである。

三輩生中、雖_二行有_二優劣、莫_二不_二皆發_二無上菩提_一。此無上菩提

心、即是願作^レ仏心、願作^レ仏心即是度衆生心、度衆生心即攝^レ取衆生、生有^レ仏国土一心。是故願生^レ彼安樂淨土者、要發^二無上菩提心^一也。

五念門の中で、礼拝門、讚歎門、作願門、觀察門を助因としている。

菩提心正因説は、元曉以前の浄土教学者に共通する流れであるが、特に元曉においては発菩提心の説明を『隨事・順理』の二つに分けて行つたことと、『無量寿經』に拠点を置いていることが注目すべきところであろう。

元曉は次に助因について述べているが、殊に、『下輩の十念』について詳細に述べている。下輩の十念には二義がある。隱密の十念と顯了の十念がそれである。

隱密の十念とは、第三純浄土の果を望むことであり、『弥勒発問經』に説く十念である。

爾時弥勒菩薩白^レ仏言、如^二仏所説阿弥陀仏功德利益、若能十念相續不斷念^一彼仏者、即得^二往生^一、当^レ云^二何念^一。仏言、非^二凡夫念^一、非^二不善念^一、非^二雜結使念^一。具足如^二是念^一、即得^二往生安樂國土^一。凡有十念、何等為^二十^一。

と云い、その十念とは、一、常に慈心を生じ、二、深く悲心を生じ、三、護法心を生じ、四、決定心を生じ、五、深き心が清浄であり、六、一切種智心を生じ、七、尊重心を生じ、八、味著心を生ぜず、九、深く種種善根因縁を起し、十、正念觀仏することであると説いている。この十念は凡夫の十念ではなく、初地以上菩薩の能く具足すべき十念である。

次に顯了の十念とは、第四相對の浄土を望むことを云うのであ

元曉の浄土思想に於ける生因説（康）

る。すなわち、正定聚のみ住する浄土を望む因であり、『觀經』に云う下品下生の十念であり、口称念仏である。至誠心を以て無量寿仏を口称し、『略論安樂淨土義』の『渡河著脱』の譬喩の如く十念相續することである。

元曉はさらに、『觀經』の十念は顯了のみの十念であり、『大經』の云う十念は隱密・顯了を具足した十念であると述べている。

この隱密・顯了の十念は、曇鸞、導綽が唱えた十念をさらに具体的にした十念觀であるといえよう。

元曉は、菩提心正因を強調しているのは確かであるが、自力往生を論じてはいない。むしろ他力本願を強調しており、それは次の一句で全てをあらわにしている。

非^二直能感^一正報莊嚴、亦得^二其依報淨土^一。但承^二如來本願力^一故、隨感受用、非^二自業、因力之所^一成^二成^一。

またこの一句が、元曉の浄土思想を真向から支えている真面目であらう。

- 1 淨全（浄土宗全書、以下同）五、83上。2 淨全五、82。3 淨全五、82下。4 前に同じ。5 真宗聖教全書卷一、三四〇。
- 6 淨全五、82下。7 前に同じ。8 淨全五、83上。9 前に同じ。10 前に同じ。11 前に同じ。12 前に同じ。13 真宗聖教全書卷一、三三九。14 浄土を四重相對し、その中で、地上菩薩が所居する第三純浄土をいう。淨全五、76下77下参照。15 現存せず。16 淨全五、83上。17 淨全五、83下。18 註14と同じく、正定聚が所居する第四浄土である。淨全五、77下178上参照。19 淨全五、84上。20 淨全五、83上。

（東京大学大学院）